

#003 お天気雑記帳

だっ さい 瀬祭

最近読んだ本に、「曆」の語源が「日読み」と紹介してありました。太陽の動きから季節を知ることができた人たちは、神聖な存在として位置づけられていたようで、「聖」の語源も「日知り」とありました。

月の形の変化を使った曆の「月読み」は、誰にでもわかり、潮位も知ることができて便利なのですが、周期が約29.5日なので3年経つと季節が1ヵ月ずれ、農業曆として使うことはできません。太陽の動きを使った曆の「日読み」は、農業曆として最適なのですが、正確な曆をつくるためには専門的な天文の知識が必要です。昔の人たちがそんな難しい知識を有していたとは思えません。どのような方法で日読みをしたのか、中国の古い書物から類推してみました。

紀元前につくられた『呂氏春秋』『淮南子』などには、当時の農業曆を引用した記述があります。四季のそれぞれを“孟”、“仲”、“季”に分け、1年12ヵ月の解説があり、たとえば、『呂氏春秋』の春の最初の月“孟春”は、冒頭に「孟春之月、日在宮室、昏參中、旦尾中」と星座の説明に始まり、「東風解凍、蟄蟲始振、魚上冰、瀬祭魚、候雁北」と、その月の解説が続きます。「東風が吹いて氷を融かし、虫たちが地上に這い出てくる。魚が氷の下から姿をあらわし、瀬が捕えた魚を川岸に並べ神に供えているように見える。雁も北に帰ってゆく」という意味です。昔の人たちは、自然の装いから季節の変化を敏感に感じとっていたようです。

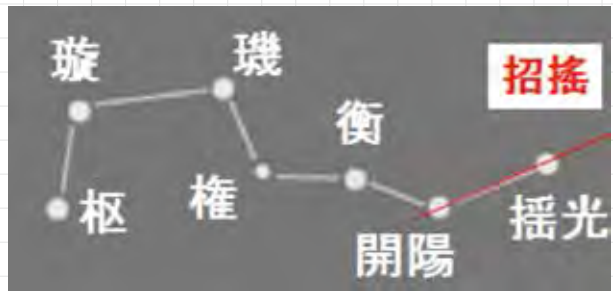
余談ですが、山口県の銘酒『瀬祭』は、この「瀬祭魚」から来ています。「瀬祭」は初春の言葉ですが、あまり知られていません。お酒とともにこの言葉が広まれば、将来は、季節を代表する言葉としても使われるようになるかもしれません。

太陽は1年で天球を一周しますので、太陽が位置する星座を知ることにより、季節がわかります。“孟春”の「日在宮室」は、太陽が二十八宿の“宮室”（ベガサス）に位置していることをあらわしています。ただ、太陽が出ている昼間に星座を観測することはできません。そのため、いくつかの方法が考案されていたようです。「日在宮室」に続く「昏參中、旦尾中」は、“昏”（日没時）と“旦”（明け方）に南中する星座を示しています。各星座の相対的な位置がわかっていますので、日没・明け方に南中する星座がわかれば、太陽の位置を類推することができます。この他、太陽に最も近い惑星である水星の位置を観測する方法や、満月の位置から反対方向にある太陽の位置を類推する方法もあり、おそらく、一つの方法だけでなく、いくつかの方

法を組み合わせると、太陽の位置から季節を知ることができるようになっています。

季節	太陽	二十八宿				昏中	旦中	招搖
孟春	立春	宮室	宮室	壁		參	尾	寅
仲春	春分	奎	奎	婁		弧	建星	卯
季春		胃	胃	昴	畢	七星	牽牛	辰
孟夏	立夏	畢	觜	參		翼	婺女	巳
仲夏	夏至	東井	東井	輿	鬼	亢	危	午
季夏		柳	柳	七	張	心	奎	未
孟秋	立秋	翼	翼	軫		斗	畢	申
仲秋	秋分	角	角	亢		牽牛	觜	酉
季秋		房	房	心		虛	柳	戌
孟冬	立冬	尾	尾	箕		危	七星	亥
仲冬	冬至	斗	斗	牽牛		壁	軫	子
季冬		婺女	婺女	虛	危	婁	房	丑

これらの方法のほかに、北斗七星から季節を知する方法もあります。北斗七星は柄杓（ひしゃく）の形をしています。北極星に近いほうから順に、“枢”“璇”“璣”“權”“衡”“開陽”“搖光”と呼び、柄杓の柄にあたる第6、7星を一直線に結んだ方向を“招搖”と呼びます。星座は地球の自転によって一日に一回転していますが、毎日、“昏”（日没時）に北斗七星を観測していると、地球の公転によって、北斗七星が時計の針のように一年で天球を一周するような動きをし、これによって季節を知ることができます。『淮南子』では、“孟春”の冒頭が「孟春之月、招搖指寅」となっており、“招搖”が図に示すように12方位の“寅”（東北東）を指していることを意味しています。



▲ 孟春の北斗七星（招搖が東北東）

『淮南子』には「斗は日に行くこと一度、十五日を一節と為し、以て二十四時の變を生ず。斗、子を指せば即ち冬至なり……十五日を加えて、癸を指せば即ち小寒なり……十五日を加えて、丑を指せば即ち大寒なり……冬至を距ること四十六日にして立春なり、陽気もて凍を解く……十五日を加えて、寅を指せば即ち雨水なり……」と、北斗七星を使って二十四節気の解説した記述もあります。北斗七星を使う方法は、星座の名前を覚える必要がなく、そのため、より簡便な方法として普及していたのではないかと思います。

気象予報士 (株)富士ピー・エス顧問 **松嶋 憲昭**